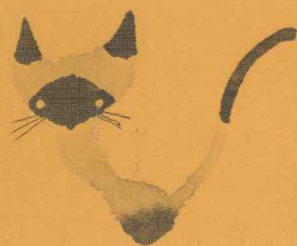


シャム猫ロマンの放浪



猫ロマンの放浪

藤原 審爾



新潮社版

シヤム猫^{ねこ}ロマンの放浪^{ほうろう}



著 者 藤原審爾

昭和四十九年九月二十五日印刷

昭和四十九年九月三十日発行

発行者 佐藤亮一

印刷所 株式会社金羊社 製本所 大口製本株式会社

発行所 郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地

株式会社 新潮社

電話 業務〇三(266)五一―編集〇三(266)五四―

定価 七五〇円 振替東京八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

1967. 10. 10



シヤム猫ロマンの放浪・目次

わが名はロマン 7

寸足らずの若者どもに悩まされる話

猫にひそかな芸を 37

善人は愛されながら損をするということ

猫屋敷の美人後家 67

ようやく安住の地をみつける話

決 闘 97

猫のねうちは銭ではきまらないということ

猫ぎらい 114

猫ぎらいで評論がかけるといふ空恐ろしい話

ロマンの憂鬱 135

怪猫あらわれ、ロマンうろたえること

猫化け寺 158

本邦唯一の猫化け修行の寺の話

公害猫 191

近頃、公害でひどい目にあっている猫族のこと

猫の自由と権利について 215

哀れ、木ッ葉役人のためにとらわれた猫の話

装幀・插画
村上 豊

シヤム猫ロマンの放浪

わが名はロマン

この細君は、小柄で小股のきれあがった可愛い女で、歌手志望のモデルである。おれが最初に会ったのは、半年くらい前の夏の終りの頃だった。おれの飼主の作曲家の家で、おれが庭から居間へあがって行くと、居合せた彼女が、

「うわあ、素敵！」

とおれを抱きあげ、おれに頬ずりをした。つるつるした頬つべたの感触は、満更わるくなかった。ぶうんと麝香じゃこうのような汗の臭いがして、いささか刺戟的でもあった。ちよつと抱きかたの力の入れかたが強すぎるところが、おれの好みではなかったが、そこまで求めるのは酷こというものだろう。まあ、愛想よくおれは、ごろごろ喉のどを鳴らしてやった。するとおれの飼主なのでぶの作曲家は、また彼女のところへ長椅子からやってきて、彼女にすり寄ってだ、

「気に入ったんなら差し上げるよ」

と実にあまったれた声で言うんだ。おれの飼主はもともと彼女にいかれていて、この間

もレッスンの最中に、彼女の手をとり、

「絶対、君を売りだしてみせますよ。ぼくを信頼して、身も心もぼくにあずけなさい」
なんてうたうような調子で言っていた。

新しい弟子が出来るたびに、おれの哀れなでぶの飼主は、太った石鯛のようなわが顔の
できを忘れて、いじらしくかき口説くのだから、おれは別におどろきもしなかったが、お
れを差し上げるといふのには、おれもおどろいた。おれは今の生活に不満はないし、環境
をかえるのも好きではないんでね。

そこでおれは彼女が断わってくれるのを祈ったんだが、彼女の気持はそれどころではな
かったのさ。でぶの石鯛がおれをのぞきこむふりをしながら、彼女のむきだしの胸のあた
りや腕へ、頭や顎をこちょこちょとおしつけるので、彼女は鳥肌を立てていたんだもん
ね。彼女はでぶ石鯛から逃れたいばかりにいきなり、奥へむかって、

「奥さまっ、この猫を、ほんとにいたたいちやっていいかしら」

と大きな声をだした。隣のそのまたむこうの台所で、御飯の支度にとりかかっていた奥
さんが、それで台所から手を拭きながら出てきた。でぶのエロ石鯛は、でれでれのくせに、
こういう時にはおそろしく敏捷なんだ。ぱつと身を翻^{ひるがえ}して、長椅子へ逃げこみ、奥さんが
出てくると、

「れい子君がロマンをほしいと言ってるんだよ、差し上げちゃどうかね」

おっとりした口ぶりで言いだした。この奥さんときたら、おれたたちのことにはとても詳
しいんだ。ニヤアがトイレで、ニヤンがウォーターで、ニヤアニヤアが食事だということ

まで知っているほどなんだが、亭主のことはさっぱりわからないらしい。わかっているのだが、知らんぷりをするのかもな。

「そうね、れい子さんのところなら、可愛がってもらえるでしょうね」

奥さんはどっちつかずの返事をしたんだが、彼女のほうはエロ石鯛からうまく逃げたいばかりだから、たちまち、

「うわあ、うれしい」

と勝手にきめて、そのままおれをここへ連れて帰ったんだ。てんでおれの意志など認めようとしないうし、おふくろや妹と別れの挨拶一つさせてやろうという気がない。おれは厄介なスケにつかまったら、なんとなく思ったが、まったくその通りだった。

表の赤い車に乗って、奥さんが見送っているときは、おれを膝のくぼみへやさしくおいていたが、門から路へ左折して出て、奥さんがみえなくなると、とたんに彼女は様子が変わった。「どえっち」

いきなりそう言って、おれの首の皮をつまんで、うしろの席へほうり投げた。べつにおれはなにもしたわけじゃない、ちょっと匂いをかいだだけなんだ。それでこんなあつかいをされるようでは、さきが思いやられる。

それにしても可愛い顔に似合わず彼女は、ずいぶん荒っぽい女なんだ。おれをのせてこのマンションに帰ってくると、外出しかけた一人の奥さんが、おれを見つけて、窓からのぞきこんで、

「まあ可愛い猫、シャム猫ね」

と言った。するとどうだろう、彼女はこともなげに、こういうんだ。

「猫をお好きなのね、あげましょうか」

一日二日のうちに、でぶ石鯛がおれの様子を見にくるふりをして、彼女にさわりにくるにちがいないのだし、むろん奥さんだってやってくるだろう。まるきりそんなことに気がつかないんだから、あきれたね。運よく相手の奥さんが、よい心根の人だったもんだから、「こんなお高いもの、いただけませんわ」と断わってくれた。

「あらこの猫、高いんですか」

まったく情けない女なんだ。

「御存知ないの、とてもいい若猫よ。利口そうだし、強そうだし、三四万円するでしょうね」

「へえー、おどろいた」

おれとしては少々心外な値だったが、それでも急に彼女はおれを見直したね。ばかにやさしい声になって、

「さあロマンちゃんいらっしやい」

とおれを抱き、エレベーターで四階のこの家へ連れて帰った。

部屋へ入ると、すぐおれを台所へ連れて行って、ミルクとハムを御馳走してくれた。ミルクはともかくハムは魚入りで、あんまりただけなかったね。

そのあと、あれで十分くらい、彼女はおれを見物していたが、なにせあきつぽくて根気がない女なんだから、そのうちぶいとおれをおっほりだして、自分の部屋へ行ってしまった

た。おれのトイレもつくらずじまいなんだから、あきれたもんだ。

頭の育ちがわるい女を相手にしてもはじまらない。一ト休みしてから、おれはトイレを求めて部屋の中を見廻ってみた。部屋といっても、二部屋しかなくて、ベランダのある居間とその横にある寝室だけなんだ。

椅子やテーブルのある居間で、用を足すわけにはいかないから、おれはベランダへ出てみた。ベランダには植木鉢が十ばかり並んでいた。見たところ夜店で買ってきたまま、ろくに手入れもしていない様子なんで、おれは気をきかせて、その根もとのあたりへ、じゃあつとやっておいた。近頃、都会のものは、人間といい草木といい、実際、バイタリティがないね。おれのじゃあつをこやしにするどころか、当っちゃって、二三日でみな枯れてしまった。はなしにならんよ。

ところで彼女は、でぶ石鯛には独身だと言っていたものだから、おれもこれからこの家で、彼女とふたりで暮すのかと思っていたんだが、とんだくわせものさ。夜中になると、色白小ぶとりの内緒の亭主が、こそこそと戻ってきたんだ。いささかがっかりしなくもなかったね。

色白小ぶとりの彼は、いくらか猫について知識をもっていて、寝室の椅子の上で寝そべっていたおれをみて、

「こいつァ、いい猫だ」

「四五万するそうよ」

「ほう」

とこのあたりまでは、ありきたりだったのだが、それからあとがよくなかった。いきなりおれを抱きあげて、ベッドへ腰かけ、腿の上でおれを仰向けにひっくり返し、おれの後肢をひろげて、のぞきこみ、

「おお、いい玉をしとるう」

とうれしそうに言うんだ。こういっちゃなんだが、おれの袋は黒々と豊かであって、いささか自信がある。それにしても初対面で、そんなところをまずしらべるとは、いやらしいすぎると思ったが、それはおれの思いすごしだった。やつは、にやりと笑って、

「種猫にして、十匹仔猫をもらえば、安く売っても二十万か。うん、悪くない」

と言ったね。

顔はぼちゃっとしてかわいらしい男なんだが、中味はかわいげがなくて、ゆとりがなさすぎる。ゆとりがないといえ、聞えがいいが、万事金でしかないというぐあいなんだ。その晩も、彼女に、脱げ脱げとしつくくすすめていたね。

どうやら映画会社で、裸になってベッドシーンをやる女優をさがしているんで、それを彼女に演れとすすめているんだ。細君は計算高いくせに、なかなかうんといわない。

「あんだ、あたしの裸をみんなに見せて、なんともないの」

「だけど、チャンスだぜ」

「裸になるだけじゃなくて、裸のよその男に抱かれなきゃならないのよ。それで、あんだ、平気でいられるの？」

「現実なら、許せないよ。しかし、これは演技なんだから、気にする必要はないんだ」

「とてもあたしには出来ないわ、氣味わるくて」

「監督もカメラマンも、照明もいるんだから、余計なことをしたりする余裕はないんだよ。だいじょうぶさ」

「そうでもないんだってよ。みんなが見てるから、よけいたまがないって、メッちゃんと言ってるわ。大女優だって、一度ぬぐと、味しめちゃって、なんどでもやりたくなるそうよ。本番よりいい時があるってよ。そんなの、あんた、平気？」

「しかしなあ、将来のことを考えると、いまのうちに稼いでおきたいんだ。おまえだって、いつまでもモデルやっているわけにはいかないだろう。そうなってから、したばたしたっておそいからな。おれだって、売れてくれりゃいいけど、チャンスに恵まれなけりゃあ、それまでだもんな。一ト稼ぎして、生活費だけは出るような店をつくつときたいよ、そうだろう」

「そりゃあそうだけど、あたしってさ、とめてもとまらないようなところがあるでしょ。裸になって、有名になって、どんどんお金が入ってくるようになると、あんたなんか要らないと思うようになるかもしれないわ。そうなってもいいの？」

「よかアないよ。だけど、チャンスなのにおしいなあ」

「でもお店くらいなら、ほかに方法があるわよ」

「どういう方法だい」

「お金持ちのおじさまだっっていいじゃないの」

「冗談じゃないよ」

「あらおかしいわね、ポルノ映画に出ても平気なのに、駄目だというの」

「あたりまえだ」

「だって内緒でやれば、あんたにだってわかりはしないし、へるもんじゃないし、せりふを覚える必要もないし、ずっと楽だと思ふけどなあ」

彼女は本気で言ってるんだから、恐れ入ったね。しかしそれにしても、自分の細君を裸にして、一ト稼ぎしようというのも、相当たくましい。

もっとも彼のほうが、少々えげつないといえなくはないが、彼女のほうだって出来がわるい。あくる朝、九時ごろ彼は起きだしたんだが、彼女のほうは起きて彼のために、御飯をつくってやったりする気は、全然ない。彼のほうもどうやら馴れっこになっているらしくて、パンにハムとチーズをくるんで、ひとときミルクで流しこみ、さっさと勤め先へ出かけていった。あわれな、ヒモまがいの亭主なんだ。あわれといえば、おれのほうだったね。ともかく午すぎ彼女が起きだすまで、えさにありつけなかったんだから。おれは、居間で寝そべりながら、彼女が起きるのを、すぎ腹をかかえて待っていたんだが、しみじみとんでもないところへ連れてこられた、これじゃもたないと思つたね。

もたないといえば、この家のいかがわしさにも、まいったね。だいたい色白小ぶとりの彼も彼女も好色すぎる。のべつまくなし病にかかっている。おれは最初の晩、将来を語りあっている二人の話をきいたものだから、内容はとにかく、それなりに将来のことを考え